

ハイブリッド・ドラマプロジェクト2000 —読解、日本事情を経て、ドラマを含んだ研究発表に至る—

三浦香苗・山口実千代

キーワード：ドラマ、研究発表、ハイブリッド、楽しく学ぶ、日本事情、漫画読解

I. ドラマプロジェクトの理念と方法

1. ドラマプロジェクトの理念
2. ドラマプロジェクトのテーマと方法

II. 準備

1. 指導者側の準備
2. なぜ『サザエさん』を選んだか

III. 活動の実際

1. 研究グループ
2. ドラマグループ
3. 合同練習とリハーサル

IV. ドラマプロジェクト発表会

1. 発表会の進行
2. 発表の形態と内容
3. 発表会の評価

V. 反省と展望

1. 研修生達の感想
2. 指導者側からの反省
3. 展望

資料

1. 発表中の寸劇の要約と出典
2. 研究グループの発表原稿
3. 写真

英文要旨

はじめに

金沢大学留学生センターの日本語研修コースは、平成7年(1995)10月の開講以来、年間2回連続して開講され、平成12年(2000)3月には、第9期を修了した。

本コースでは、専門教育への橋渡しとするための「口頭研究発表プロジェクト」を通常の日本語授業と並行して行い、着実な成果をあげてきた。しかし、毎年、前期と後期とで留学生のタイプが異なるため、「口頭研究発表プロジェクト」の実施による教

育効果に差が生じていた。すなわち、コースの受講生が研究留学生のみからなる前期の場合は、「口頭研究発表プロジェクト」の実施により、受講生の日本語能力のみならず、研究上の意欲と能力の向上に顕著な効果が認められたのに対し、研究発表に不慣れな教員研修生中心の後期の場合は、「口頭研究発表プロジェクト」を実施するために相当の困難を生じていた。そこで、後期の受講生のために、日本語と日本事情を主体的に楽しく学びながら、同時に、専門教育への橋渡しとなるものはないかと考えた。

従来、「口頭発表プロジェクト」では、自分でテーマを見つけ、データを収集・分析し、それを研究発表の形で対外的に報告できるところまでまとめられるように指導する方針を一貫してとってきた。しかし、後期研修生に対しては、そのような指導の理念は必ずしも必要ではなく、また適切でもないと思われた。そこで、従来の口頭発表のための指導の成果を生かしつつ、新たなパラダイムを展開するために、複合的な教育課題としてとりあげようと試みた。

様々な試行錯誤のうえで着目した構想は、「ドラマ」という形式であった。すなわち、個々の学生ごとに個別に行う従来の口頭研究発表でなく、特定の口頭研究発表に合わせて、その発表内容に即したドラマを同時に補完する形で進行させ、それに受講生全員が参加するという「ドラマプロジェクト」の構想を得た。この方法により、受講生は狭義の言語としての日本語の学習に加えて、非言語行動を含む日本文化、生活事情をドラマという形式をとりつつ三次元的に学習し、さらに同時進行の形で行われる研究・調査方法、口頭発表技術等との連携を学ぶことになる。その意味で、異種の要素を組み合わせつつも全体としては一つのプロジェクトとなる学習形態であることから、これを「ハイブリッド・ドラマプロジェクト」と名付けた。

本稿は、その初めての試みの現場報告であり、2000年2月23日のドラマプロジェクト発表会の直後に執筆したものである。もとより、詳細な検討を経たものではなく、暫定的な中間報告にすぎず、各方面のご批判・ご意見を受けるためにあえて緊急に発表したものであることをあらかじめお断りする次第である。

I. ドラマプロジェクトの理念と方法

1. ドラマプロジェクトの理念

—21世紀へ向けて開かれた日本語教育を模索する

日本語学習者は、若年層を除いて、大学で学ぶ留学生のみならず社会人も自分の専門的な領域をもっているのが通例である。サバイバルや初級の段階であっても、それを使いこなしつつ自己発現を行いたいというのが知性を備えた学習者の欲求である

う。研究者でなくても、成年の社会人であれば、ビジネスマン、技術者、あるいは主婦等にもそれぞれの専門的な研究上の意欲と活動がある。日本語はその専門領域における研究活動を可能にする手段として学習されているものと認識すべきである。それゆえ、我々は、その学習者の需要に応えるものを提供する必要がある。

その意味で、それを可能にする日本語教育は、学習者に単に「日本語を教えればよい」という段階を超えなければならない。ことに、学習者が主体的である以上、彼らが主体的に関わるものでなければならない。しかも、学習意欲を維持し、昂進させるためには、達成感のある、しかも楽しさのある学習活動を企画しなければならない。そして、学習者の本来の能力を生かし、より高度な言語活動へと昇華させなければならない。

そこで、本プロジェクトの性格を次のように定めた。

- ・ 大学で行う日本語教育という枠の中で
- ・ 学習者の主体的な取り組みを促す活動
- ・ 研究活動へのスムーズな移行を可能にする日本語学習
- ・ 達成感のある、しかも楽しさのある活動
- ・ 普通の日本語の授業と平行して、5ヶ月の集中コース内のできる活動

2. ドラマプロジェクトのテーマと方法

9期生の大きなテーマは、本プロジェクトの性格をふまえ、限られた時間の中で一定の効果を上げるため、教師側があらかじめ準備し、「日本の家族像」とした。

そして、次のような方法をとることとした。

- (1) 本コースに参加した学習者は、日本語レベル中・上級者と初心者に分かれたので、その両方がそれぞれのレベルに応じた役割を担うこととした。すなわち、中・上級者（研究グループ）は研究発表をし、初心者（ドラマグループ）は研究発表の一部として寸劇をする。¹

なお、実際の指導は、研究グループを三浦、ドラマグループを山口が中心となつて行うこととした。

- (2) 日本事情を兼ねて漫画読解を行う。
- (3) 素材として4コマ漫画とシリーズもの漫画の数場面を利用する。
- (4) 小テーマは、教師が幾つか準備しておき、研究グループと教師が読解を行う課程で話し合い、絞り込む。
- (5) 研究グループは、小テーマに関するアンケートを作成し、金沢大学の日本人学生にアンケート調査を行う。アンケート結果と読解から得た結論をまとめ、研究

発表する。

- (6) ドラマグループは、(5)の研究発表の中で、漫画からとった数シーンの寸劇を演じて発表に参加する。

II. 準備

1. 指導者側の準備

前節に述べた性格のプロジェクトを行うために指導者側で行った準備は以下の通りである。

【第9期のドラマプロジェクトの方向性を決める】

1999年10月²に、このドラマプロジェクトの方向性を決めるためのブレインストーミングを行い、複数の日本語講師の意見を参考にすることができた³。そして、大きなテーマを「日本の家族像」とすること、4コマ漫画の寸劇を取り入れること、研究グループ（日本語力が中上級の者）とドラマグループ（日本語力が初級の者）の役割を分けることを決定した⁴。

【素材となる漫画の選別】

三人の教師によるプロジェクトチームを組み⁵、数種類の漫画を手分けして読んで、素材となるものを選別した。その結果、『サザエさん』、『コボちゃん』、『クッキングパパ』を採用した。いずれも日本の家族の生活を描いているが、『サザエさん』は昭和の古き良き時代を思わせる家族像、『コボちゃん』は現代の中堅層の子供時代の家族像、『クッキングパパ』は現代に生きる新しいタイプの家族像である。主として『サザエさん』を使い、『コボちゃん』は補助的に、『クッキングパパ』は現代の若い家族像として採用することにした。他に、『ちびまるこちゃん』、『クレヨンしんちゃん』を検討したが、今回は扱わないこととした。なお、選別の根拠については、II-2. 「なぜ『サザエさん』を選んだか」を参照されたい。

【下位テーマ候補を見つける】

下位テーマを見つけるために、三人で手分けして三つの漫画を詳しく読み、以下の諸点で特に注目される数編を選びだした。すなわち、日本の平均的な家族像を探る意味で、(a)家族の父親または夫に対する言葉遣い、(b)家族の父親または夫に対する態度、(c)家庭の内外で起きる日常的な出来事の内容などの諸点を重視した。

この作業を行った理由は、漫画読解授業の中で学生自身が下位テーマを見つけるように指導するためには、適切な素材を提供しなければならないからである。

選んだ下位テーマ候補は次のものである。

「夫として父親としての男性像」

「家庭内での男尊女卑」

「家族の言葉遣いに表れた男性の地位の変遷」

「叱られた時に子供の取るストラテジー」など。

【ドラマ指導の準備となるものの選別】

家庭生活の場面を想定して、発音指導教材、日本のうた、短い会話文を選別した。

2. なぜ『サザエさん』を選んだか

4コマ漫画『サザエさん』は楽しく笑うことのできる家族漫画として、また完成度の高い優れた作品として、長い間多くの人々によって支持されてきた。そのことも『サザエさん』を選ぶ一つの理由であるが、今回の目的にかなうものとして、次の点が特に優れていると思われる。すなわち、『サザエさん』の家族構成が歴史性（終戦後から高度経済成長までの大家族制）と現代性（経済安定にはいつても好まれるようになってきた娘夫婦との同居など）を合わせもつことである。

サザエさんの一家は、平均的とまでは言わなくとも、いわば日本の家族の一つの典型として考えられる。単なる大家族というのは希少な例であるので一般的ではない。また、核家族では行動の状況と会話の多様性がない。日本語教育の目的の立場から考えると、『サザエさん』のような設定は、多くの示唆を与えるものである。

また、『サザエさん』が4コマ漫画という短く展開の速いものであることも、初級者の劇として演じやすいと思われた。

他方、人気漫画という点で一般に評価されている『ちびまるこちゃん』と『クレヨンしんちゃん』を本プロジェクトにおいて採用しなかった理由についても簡単に触れる。『ちびまるこちゃん』は前述の大家族制、現代性の両方をもつが、トピックが主として子供の目から見た世界に限られ『サザエさん』ほどの多様性をもたない点と、主要なストーリーが今回のような研究発表の中の寸劇にはむかない点で不採用とした。また、『クレヨンしんちゃん』は、表現・語彙の下品さもさることながら、核家族であることに因る会話の多様性の乏しさと、社会性のなさ（幼稚園以外の地域社会との接点がない）から、候補となり得なかった。

Ⅲ．活動の実際

ここでは、活動の報告を研究グループとドラマグループに分けて述べる。

1．研究グループ

このグループの構成員は、研究留学生四人で始めたが、途中で一人が脱落し、一人がドラマグループに入ることを希望した。研究発表したのは残った二人（オーストラリアのMと、デンマークのJ）であった。以下、学生名はイニシャルで記す。なお、指導は三浦が担当した。

発表会本番までに次のような段階の活動を行った。

第1段階：オリエンテーション

第2段階：大テーマ「日本の家族像」を掴むための数種類の漫画読解

第3段階：小テーマを決定する

第4段階：小テーマに基づいたアンケート調査

第5段階：研究発表へ向けての準備（アウトライン書き、原稿書き、スライド作り）

第6段階：合同練習（ドラマグループと合わせてみる）

第7段階：リハーサル

11月18日、コースが始まって1ヶ月を経過した頃に第1段階を始め、毎週1回1コマ（1コマは90分）、リハーサルを含めて費やした時間は、合計で授業時間16コマ程度、課外指導や宿題に12時間程度であった。

【第1段階：オリエンテーション】

プロジェクトの理念、テーマ、方法、最終プロダクトが何であることを理解させることを目的とする。レジュメに沿って教師が解説するとともに、学生の主体的な参加が不可欠であるため、留学生との話し合いでプロジェクトが進行するように留意した。更に、従来の研究発表用教材『5ヶ月で口頭発表』の内容を紹介し、優れた口頭発表例をビデオで研究させるため、1コマを使った。

【第2段階：大テーマ「日本の家族像」を掴むための数種類の漫画読解】

この段階の目的は、「日本の家族像」を把握し、下位テーマを幾つか発見することである。方法としては、三人の教師の準備グループが選別した漫画の20シーン程度の読解を行った。『サザエさん』、『コボちゃん』、『クッキングパパ』を漫画の描かれた時代

を追って検証することにした。1編ずつ読んで意味を確認し、可笑しきの理由を話し合い、日本と自国の事情の違いを話し合ったりした。出身国がデンマーク、ポルトガル、オーストラリア、アルメニアと異なるため、互いに他国の事情を知ることにもなり、興味深い話し合いができた。この段階のために1.5コマを使った。

このグループの三人（以前日本に滞在した経験がある）の日本語力には丁度良いレベルで、よく笑いよく話した。初めて来日した一人には日本語のレベルがやや高すぎたようで、この留学生は後にドラマグループに移った。

【第3段階：小テーマを決定する】

ここでは、今回のプロジェクトの下位テーマを絞ることを目的とする。前段階で検討した下位テーマ候補の中から、留学生自身が興味を覚えたものについて、費やすことのできる時間、探すことのできる資料、アンケート調査のしやすさ、ドラマグループが演じやすいもの等の点から検討した。話し合いの結果、日本の家庭における「父親の権威」と「夫と妻の関係」を終戦後の昭和20年代から平成まで時代を追って検証するという方法をとろうということになった。下位テーマを「夫として父親としての男性像」と定めることにした。

「家庭内の男尊女卑」についても検討したが、漫画『サザエさん』には、男尊女卑よりもむしろ「女性に支えられた男性の権威の可笑しさ」がよく表されていること、及び『クッキングパパ』に「家事を主体的に行うことによる近未来の男性の権威」が象徴されていることに着目して、「夫として父親としての男性像」の方を選んだ。ちなみに、このテーマは研究グループが参加している教養的科目「日本事情II」の討論でも取り上げられたテーマである。そのため、アンケートの質問も作りやすかった。この段階にも1.5コマを要した。

【第4段階：小テーマに基づいたアンケート調査】

この段階では、従来の口頭発表プロジェクトの要領で、アンケート調査の準備（アンケート項目作り）、実行、データ入力、分析、まとめが日本語でできるようになることを目的とする。計3コマの授業時間と7～8時間程度の課外活動（宿題、アンケート実施を含む）を要した。

[アンケート作り]

アンケート項目作りのために教師が与えたものは、わずかであった。即ち、「夫として父親としての男性」の側面を浮き彫りにするような質問の例と、答えの選択肢の作

り方を与えただけであった。従来の口頭発表プロジェクトでは、アンケート項目の作り方を重視して、有効な質問や選択肢の作り方を丁寧に教えるが、このグループは日本語力も高い上、時間の制限もあったので、あまり教えなかった。そのためか、留学生が自力で作ったアンケートは教師によって大幅に修正されなければならなかった。なお、アンケート作りには1コマと課外指導時間を3時間程度費やした。

[アンケート調査実施]

アンケート調査は、12月20日に行った。教養的科目の「日本事情II」をとっている1・2年生を中心とした金沢大学の若い日本人学生を対象とした。50人のデータが集まった。留学生だけでキャンパス内でアンケートをとったが、2～3時間かかったと思われる。

[データ入力、分析、まとめ]

教師がデータの入力方法を簡単に教え、一人の学生が宿題としてデータ入力した。

生のデータ（エクセルに入れた数字や記号の表）を見ながら、そこから何が読み取れるかを授業で検討した。その際、データ処理に詳しい理系専門教官の同席を願った。留学生は、このような分析に不慣れなせいか、一つの項目についてのパーセンテージを見るだけで終わってしまい、データを組み合わせて分析するような操作をしなかった。そこで、各自が分析しその結果を出すことを宿題としたが、教師の要求したレベルの結果を出せた留学生はいなかった。

この段階で、この種のデータ分析やコンピュータの扱いができない二人の留学生が脱落した。そのうちの一人はドラマの方が自分も活躍できるという理由で、ドラマグループに移った。残った二人もアンケート調査の分析はあまり得意ではなかったため、ごく単純な分析に留まった。学習者がコンピュータを使った高度な分析能力をもつという幸運には恵まれない場合の対処法を次回への課題として考えなければならない。

なお、データ入力と分析及びまとめには、授業として2コマ、課外指導として2時間程度を費やした。

【第5段階：研究発表へ向けての準備】

研究発表のためのアウトライン作り、原稿書き、スライド作りを目的とする。

[アウトライン作り]

前段階の分析が単純であったためか、二人の留学生達は中心となる論点を見い出すことができず、発表の筋書きをうまく作ることができなかった。そこで、教師が「男

性像」の焦点となる「従来の父親の権威」「従来の夫としての男性」「現代的な若い家庭の男性像」でまとめてみることを提案し、その案に基づいてアウトラインを作る宿題を出した。

留学生のアウトラインは非常に簡単なもので、未完成であったため、構成や表現方法などに関して、教師による多くの助言と修正を要した。アウトライン作りは、「口頭発表プロジェクト」でも難しい箇所であるが、日本語初級者でも一応自力で書くことができる。今回、日本語力があるにもかかわらず十分に書けなかった理由として、時間不足以外に、「口頭発表プロジェクト」のような指導を一切しなかったことが考えられる。授業時間は2コマであったが、宿題として2～3時間時間費やしたものと思われる。

[原稿書き]

アウトラインと同じく、学生の書いた原稿は未完成である上、日本語の間違い及び分かりにくさ、日本事情に関する知識不足による勘違い等が見られた。そのため、教師によって多くの添削が施されねばならなかった。原稿書きは、日本人学生の場合、初めと最後の言葉や聴衆にスライドを見ることを促す言葉等は原稿には書き入れないと思われるが、留学生の場合は、言う言葉すべてを原稿に書いておく必要がある。研究グループの二人は、そのことにも気付いていなかったようで、発表の節目節目の決まり文句（先ず初めに、次に、最後に、では次の寸劇を御覧ください等）も、自分で書いた原稿には抜けていた。

「口頭発表プロジェクト」では、これらの言葉やタイミングを前もって教えるので、普通程度の学生なら自力で随所に入れることができる。日本語力が中・上級ということになっていても、また研究留学生であっても、これらを日本語で適切に使いこなすことは、教えられなければ難しいものだと実感した。外国語で発表することの難しさである。また、スライドを作った後、スライドを映すタイミングの印を原稿に書き入れた。

この段階では、授業時間2コマ、宿題として数時間を費やした。

[スライド作り]

聴衆の理解をたすける、発表にふさわしいスライドの作成を目的とする。

どのようなスライドを作るかを一緒に原稿を見ながら選別し、作成はコンピュータの得意な留学生Jに任せた。わかりやすい日本語に直す部分を教師が手伝った。今回はグラフや図表のスライドを作らず、聴衆の理解をたすける短文のスライドを10枚作っただけだったため、短時間ですんだ。スキャナーで漫画を取り込み編集する作業には時間がかかるので、宿題とした。

授業時間は1コマ、宿題として数時間を使った。

以上、研究グループの第5段階までの活動内容を記した。

2. ドラマグループ

このグループは日本語力初級の留学生8人で始めた。国で少し独習をしたS(タイ)以外はほとんど日本語学習歴ゼロの学生であった。途中で研究グループを抜けたPが加わり、9人となった。集中コースが始まって2週間余り経過した時点でのスタートで、教科書『みんなの日本語』の10課を学習している段階であった。毎週2回2コマ(1コマは90分)が充てられたが、そのうち1コマは流動的で、コンサルテーションや文法の時間にもなった。リハーサルまでに計27コマを使った。

指導は主として山口が担当した。オリエンテーションは三浦が担当し、立ち稽古にも数回、リハーサルにも加わった。

発表会本番までに次のような段階の活動を行った。

第1段階：オリエンテーションと発音練習

第2段階：発音、動作、挨拶や短い会話の練習

第3段階：発表用シーンの漫画の読解と日本事情

第4段階：役の決定と、シナリオを使ったシーンの台詞練習

第5段階：シーン練習(立ち稽古)

第6段階：合同練習(研究グループの発表と合わせてみる)

第7段階：リハーサル

【第1段階：オリエンテーションと発音練習】

[オリエンテーション]

目的は、ドラマプロジェクトの理念、テーマ、方法、最終プロダクトについて理解すること、及び寸劇の練習が日本語習得に役立つことを納得することである。

日本語のレジュメを読むことができない段階なので、教師が口頭で日本語と英語を使って説明した。更に、従来の研究発表用教材『5ヶ月で口頭発表』の内容を紹介し、優れた口頭発表例をビデオで研究した。漫画『サザエさん』の紹介もした。ここでは、発音練習と合わせて1コマを使った。

[発音練習]

音声面が非常に重要であることを理解させるために、発音練習をした。

各人に「おはようございます」「ってきます」「すうがくのきょうしです」などの簡単な文を言わせ、教師のモデル発音と比較して問題点を指摘するように言った。実際には留学生は問題点が何であるかほとんど指摘できない。そこで、教師が音自体の正確さ、拍、リズム、卓立、ポーズ、イントネーションに分けて、指摘し、練習させた。この段階での留学生の音声は問題点だらけで、先が思い遣られたが、少なくとも自分の問題点がある程度意識できるようになったことは収穫であったと考える。

【第2段階：発音、動作、挨拶や短い会話の練習】

この段階の目的は寸劇を演じるための基本練習である。

方法としては下記の4項目を学習することにした。

- ・日本の歌を歌う (発音練習と日本事情)
- ・挨拶を通して感情の入った日本語を学ぶ
- ・教科書による会話練習
- ・漫画を見て読んで理解し、演じてみる

[日本の歌を歌う]

日本の歌を歌うことにより、発音やリズムの練習をし、歌の情景や歌詞から日本人の生活感情を汲み取ることを目的とする。

『ふるさと日本のうた』(金沢大学留学生センター 1997) を使って、毎回1曲ずつ順に練習した。テープを聞き、歌詞の読みと意味の確認、口ならし、曲に合わせて歌う、という手順で練習した。歌が特に好きだという人はいないようだった。学生の希望により毎回1曲目から通して歌ったが、何人かは回を重ねても歌詞は追っていたが楽譜の部分は全然見ずに歌っていた。5回まで練習を重ねた。

結果的には成功したとは言えなかった。わかりにくい語彙に対する抵抗感をなくすために、また発音練習のために懸命に歌わせたが、この姿勢での指導に問題があったかと思う。そのほか、教師サイドの問題点として、楽しくリズムや発音の練習をさせる方法を教師自身が身につけなければ、いくら練習しても学生の身につかないこと、また、日本人の生活感情がわかるように説明することも必要であった。

[挨拶を通して感情の入った日本語を学ぶ]

まず、「行ってきます」「行ってらっしゃい」から始めた。毎回復習を重ねながら4

回目の、天候を話題にするところまで続けた。具体的な方法としては言葉の意味、使い方を教え発音練習し、ペアで言い交わした。次に動作をつけてペア練習をした。さらに感情を込めての練習へと発展させた。例えば、「うれしい」という形容詞を教え、その否定形「うれしくない」とともに二つの感情を込めての練習を行った。「行ってらっしゃい」「ってきます」の練習の場合には次のような絵カードをあらかじめ準備した。

絵カード1 嬉しそうに送り出す妻／嫌そうに出勤する夫

絵カード2 嬉しそうに帰宅する夫／嫌そうに迎える妻

最初は嬉しいのか嬉しくないのか、見ている者にはどちらかわからないという状態であった。そこで、演じる人が自由にどちらかの感情を表現し、見ている人がどちらの感情を演じたのか当てるといったゲームをする等の工夫をすることによって、徐々に下手なりにも気分を出して楽しむという余裕も出てきた。Vはすぐ上手に表情と態度で感情を表すことができた。Wは自分ではできなくても他の人にアドバイスしようとした。いつもはやや暗いと思われているMも終始笑顔を見せた。みんな興味を持って取り組んでいた。

[教科書による会話練習]

使っている教科書の会話の復習をした。普段の授業ではできなかった細かい点にも注意して演じてみるということで取り入れた。卓立、ポーズを中心に発音練習をした。どこをはっきりさせるか、はっきりさせるとは具体的にどうするかなどをみんなで考え、きちんと相手にわかってもらえるよう練習した。

復習であったにもかかわらず、学生の中には語彙を忘れていた者もいた。忘れていない者でも、手で指し示す、会釈するなどの身振りを伴った発話は難しいようだった。この段階の学生にとっては文を言うだけでも精一杯だったのだろう。

[漫画を見て読んで理解し、演じてみる]

まず、漫画『サザエさん』とその家族構成などを資料で紹介した。そして、次の第3段階（発表用シーンの漫画の読解と日本事情）へのスムーズな移行を意図して、以下のような工夫をした。

まず、状況がわかりやすい漫画の読解から始めた。すなわち、絵だけや簡単な文だけで状況が把握できるような漫画である。(例: 出産祝いにつけつけたマスオが、通された部屋で蒲団の中の三つ子を見て思わず「や!! 三びきか!」とって赤ん坊の家族のひんしゅくを買うというもの) このような漫画を3編選んだ。

段階的に語彙・表現や文法の説明・練習を行ってからおいてから簡単な漫画を見せると、

留学生は説明なしに漫画の意味が理解できる。爆笑が起こる。それは、漫画の可笑しさにもよるが、自ら理解できたという喜びでもある。

次に、学生に見せる漫画として、台詞の部分を「ですます体」に書き替え、語彙も少し替えたものを準備した。書き替えられない言葉には英語で訳をつけた。理解できた後、原文のままの漫画を渡した。発音練習等は原文で行った。漫画4編を選んだ。

【第3段階：発表用シーンの漫画の読解と日本事情】

この段階での目的は発表するための漫画を読解することである。そのためには日本事情も理解する必要がある。

方法としては、家族の呼称、家族の構成員が家庭内で各々果たす役割など自国と比較しながら考えた。(家庭内での立ち居、振る舞いなど日本事情に関する部分は他にも多々あるがそれには第5段階で言及する。)漫画は原本を見せて学生の理解できない部分は日本語、英語で説明した。

【第4段階：役の決定と、シナリオを使ったシーンの台詞練習】

演じる劇が理解できれば次の段階での目的は役の決定、台詞練習となる。しかし、この第4段階はすべての発表シーンが理解できてから役を決め台詞練習したというわけではない。実際には何編かずつ漫画を見て、読んで理解する、感情を込めて台詞を読み、覚える、演じる(立ち稽古)という手順で、徐々にレパートリーを増やしていった。即ち何編かの漫画について第3段階から第4段階、第5段階へと進む。そしてまた次の漫画何編かについて同様の順に進展させていくという具合である。

[配役の決定]

第2段階で練習した漫画3編については学生を二つのグループに分けて同じものを二つのグループが演じて互いに批評し合ったりした。その結果、一応の固定した配役を決めた。発音、演技の上手下手だけではなくいろいろな人がいろいろな役を演じるという前提で決めた。しかし、その後は学生同士で自主的に役を決めさせた。結果的には本プロジェクトの理念どおりだれもが楽しく参加できたと思う。

[シナリオを書く]

漫画は4コマだが、ドラマとなるとコマとコマの間に動作や台詞がなければ成立しないのでシナリオを補う必要がある。シナリオには他の意味もあった。演技のまずさ、発音の悪さをカバーすることである。そのための手段として以下のような配慮をした。

まず、台詞を多く長くすることによって、一言、二言聞き取りにくい言葉があっても全体の意味はわかるようにする。演じている動作がわかりにくい場合は何をしているか台詞で述べる。ただし、台詞の長さの程度も、学生の能力との兼ね合いがあり、余り長くはできない。

次に、発音の悪さのため意味不明な言葉は、その学生が言いやすい語彙・表現に替える。それによって、聴衆が聞いてわかるようになる。

[授業内容]

授業内容としては、毎回以下のようなものであった。

- ・復習 これまで練習したすべての漫画を演じる
- ・発展 演技を見ながら発音、身振り、表情などの指導、台詞の変更など行う。この点については、初期の頃は自分達の練習の様子を撮影したビデオを見て、学生が互いに批判、反省することもあった。
- ・練習 新しい漫画2、3編の台詞練習と立ち稽古

毎回新しい漫画の練習をした。最終的に選別された漫画は12編で、その全部の練習終了後は、練習はなくなり、復習・発展のみの授業内容となった。それが次の段階である⁶。

[第5段階：シーン練習（立ち稽古）]

この段階での目的はきちんと台詞が言え、演技ができるようになることである。そしてそれができなければ観客に伝わらないということである。

[シナリオ書き換え]

観客に伝える手段として、役者の発音や演技力に併せて適宜シナリオを書き換え台詞や動作を変更した。これは第4段階でも行っていたが、第5段階になるとさらに頻繁に行わざるを得なかった。このことによって徐々に客観的に見てわかりやすいものとなっていった。

[大道具、小道具]

また、この段階では観客の理解を助けるためには大道具、小道具などもできるだけ多く必要であった。学生は台詞を覚えることと発音矯正が大変で他の事まで手がまわらなかったもので、それらの準備は必然的に教師の役割となってきた。また準備したものをどこに保管しておくか等の問題も起きてきた。保管場所については、後に開放センターの

ご配慮により教室隣の図書室に置かせてもらえるようになり、随分と助かった。

[音声の問題]

この問題は最初から最後まですべての段階で一番頭を悩ませた問題だった。ともかく発音が大切と言うことで特にリズム、卓立に重点を置いて指導した。イントネーション、ピッチと注意点は挙げればきりがないが、一朝一夕に矯正できるものではなかった。

[発音矯正例]

- 1) W (ミャンマー) は、語頭の両唇破裂音 [p] と両唇摩擦音 [Φ] の区別ができない。

雨が降ってきたのに気付いて「降ってきた」と言う場面で、「ふってきた」と言わせると、何度直しても「ぷってきた」になる。文頭にもう一つ音を入れて、「あ、ふってきた」と言わせると、それらしく聞こえるようになった。状況をよりわかりやすくするには主語を入れるといいと思い、「あ、雨がふってきた」と言わせた。ところが、何度も練習しているうちに、「あ、雨がぷってきた」と、もとの「ぷ」に戻ってしまった。発音する音が増えると、注意がそちらに行ってしまうのだろう。そこで、元の「ぷ」と「ふ」の区別に戻って、ろうそくをフーツと吹き消す絵を描いて、「フーツ」と言う練習をさせた。「フーツ、フーツ、フーツ、ふってきた」と、一度で直った。W も嬉しそうだった。

ところが、数日後、また「あ、雨がぷってきた」に戻っている。ろうそくの絵を思い出させる他に、新たに「ぷって」を緊張した感じで、「ふって」をホッと弛んだ感じで言わせる。緊張、弛緩の動作をつけて発音する。「ふって」ができたところで、すぐ「あ、雨が」を加えるという練習をした。

W の発音は、最終の発表会ではきれいに「あ、雨がふってきた」と直っていた。本人も必死で練習したらしい。

- 2) M (ミャンマー) は「変なとこで見栄を張るんだから、お父さんは」と言う時文末が上がってしまう。口頭で説明しても分からないようだったので、手で示したり線を書いたりした。しかし音符を書いて指導したのが最も効果的だったようだ。また、動作をつけて「おとうさんは」と段々体全体の力を抜くようにしたが、指導が下手だったせいかあまり効果がなかった。

発表会当日、三浦、山口が気にして見守る中、やはり文末が上がっていた。

- 3) R (インド) の場合は、「何だ、このザマは！」が「なんだ、このじゃまは」となり、「俺だってたまには怒鳴るぞ！」が「おれだってたまにはどなるじょ」となっていた。「ざ」と「じゃ」、「ず」と「じゅ」、「ぞ」と「じょ」の対立で言わせて

も、なかなか直らない。舌の位置を教えても、発音できない。そこで「じゃ、じゅ、じょ」と書いて、この小さい「や、ゆ、よ」を取りなさいと言うと、すぐはっきりした「ぎ、ず、ぞ」ができ、「このざまは」「どなるぞ」が言えるようになった。

指導した側には、なぜ彼が突然できるようになったのか理解できなかったが、文字を使ったことにより、何らかの法則がRなりに作れたのだろうと思った。Rは、気を抜いている時にはもとの「じゃま」と「どなるじょ」に戻ったが、本番ではきれいに発音できた。

他にも、すべてのメンバーがそれぞれの音声の問題を抱えていたが、それらの紹介は後にゆずる。

[動作や表情の問題]

これも先に述べた第2段階における日本事情と関連した問題である。例えば、わかりやすい例で言うと、丹前を着るという動作一つにでも問題が出る。左前に着ないとか帯の結び方、結ぶ位置などである。他にも枚挙に暇がないが、波平（サザエさんの父）役に、窓を開ける動作をしなさいと指示すると、留学生は観音開きに外へ押し開けようとする。国の窓は観音開きであるらしい。

V（メキシコ）は感情を表情、身振りなどに上手に表した。しかし彼が波平として子供を叱る時、畳から立ち上がって部屋の中をうろうろしながら両手のこぶしを上げたり下げたりした。日本人の父親は威厳を保つためにじっと座って叱るのだと言うと、驚いていた。

演技となると日本人にも難しい。彼らにとって殊に難しかったのは、恥ずかしさを隠すためにする行動、いわゆる「照れ隠し」の演技だったようである。例えば④「めしはまだか」で孫に自分の威張った様子の物真似をされて「まいったな、こりゃ」と言うシーン、⑦「どれ、肩をもんであげよう」の夫にいたわられた妻が「まあまあ、あした雨がふらなければいいですけど」と言うシーンである。

④⑦は資料の漫画の番号、「」はそのタイトルで、便宜的につけたものである。資料1参照)

[上達した点]

枚挙するときりがないが2点だけ述べたい。ひとつは①「お父さんはもう許さんぞ」で父親が子どもを叱り子どもは大声で泣いているシーンである。この時、母親と姉が一言も言わずうなだれて聞いているのだが、この演技が実に進歩したと思った。

練習段階の初めの頃は、動作の心が何もわからず単に視線を下にやっていたのだが、リハーサル近くには、当惑して視線が下に向いてしまう様子が上手に表現できるようになった。練習によって演技が成長したのだろう。これは三浦も山口も感じたことだ。演技ではなく日本語がいわば体得されたように思えた。

あと一点は指導の基本としていたことが達成されたことだ。それは「大きな声ではっきりと話す」と、「観客のほうを向いて話す」ということである。たとえ二人で話し合うという場面でも半ば観客のほうを向かねばならないとよく注意した。全員がすべて上手だったとは言い難いが、この点は上達したと思う。途中でドラマグループに加わってきたPを見てこの感を強くした。彼はドラマグループの中で最も日本語の実力があつたにも関わらず、この基本ができていないため、台詞と姿勢がしっかりしていなかった。

以上、ドラマグループの第5段階までの活動内容を記した。

3. 合同練習とリハーサル

【合同練習（研究グループとドラマグループの合同発表）】

合同練習は実際には次の段階のリハーサルまで持ち越してしまった。研究グループの原稿の完成が遅れたためである。

〔研究グループ〕

この段階では、ドラマグループの寸劇に合わせて研究発表の練習をするはずであったが、実際には原稿をわかりやすく読む練習だけで終わった。

二人の発表者は日本語力がかなりあり、音声は聞き取りやすい方で、初級者のドラマグループと比較すると音声の問題が少なかった。一つ一つの音が比較的良かった。しかし、キーワードの発音が聞き取りにくいことがあった。(例：「父親の権威」がどうしても「父親のケニ」になるなど)

その他の大きな問題は、卓立をつけることが難しいこと、音の高低を間違えること、及びイントネーションがおかしいことであった。しかし、練習時間が少なかったため、特に重要なキーワードの発音と卓立の練習をするに留まった。2コマを要した。

〔ドラマグループ〕

発表原稿が仕上がらなかったため、研究グループと合わせた練習ができなかったが、

寸劇の上演順に合わせて出番以外の者が舞台準備をする手はずなどを取り決めた。

[発表会用のプログラム作成]

この段階では発表会のプログラムについても準備を始めた。教師が行った。その構成は以下のようである。

- ・表紙

タイトル—金沢大学留学生センター第9期生ドラマプロジェクト発表会
漫画に見る日本の家庭像—夫として父親としての男性—

- ・参加学生のプロフィール

両グループ11名の写真、氏名、国名、専門

- ・教官挨拶

- ・研究発表要旨

- ・漫画原本と配役

原本は、観客が何を演じているかわからないと困るので掲載した。

- ・練習風景の写真

[リハーサル]

リハーサルでは本番さながらにすべてを手順よく行えることを目的とする。

発表前日に1回目、発表日の本番前に2回目を行った。

[発表の舞台とその使い方]

教室前方に幕つきの舞台を設営した⁷。舞台の裾に演台を置き、研究グループの二人がそこで交代で研究発表をした。スライドを映すスクリーンは舞台右横で演台後方の小スクリーンを使用した。二人の発表の最中は幕が引かれ、舞台の準備がなされた。発表者が「では次の場面をごらんください」と言うと幕が開けられ、寸劇が演じられる。終わると幕が引かれ、発表が続く、という具合に進行させた。寸劇は全部で12演じられた。

[研究グループの発表技術]

発表技術の中で重要なコンピュータ操作⁸に関しては、情報工学専攻のJが得意であったので、任せることができた。スクリーンに映された図を観客にわかりやすく示すポインターの使い方や、スライドを出すタイミングを練習した。音声のチェックも行った。

[ドラマグループの寸劇]

合同練習なしのリハーサルであったが、寸劇の内容に支障はなかった。ただ発表原稿が直前まで仕上がらなかったため、寸劇と寸劇の間の時間がどのくらいとれるのかという点が明確ではなかった。この点で舞台裏準備にややとまどいがあった。

[リハーサルの達成度]

リハーサルは、1回目は幕や照明のタイミングが合いにくく、研究グループの発表の仕方も上手とは言えなかった。ドラマグループは、それまでの練習の成果か、演技に関してはかなり完成されたものであったが、大道具・小道具の設置の手際があまり良くなかった。2回目はそれらの問題はかなり軽減された。あと1回リハーサルをすることができれば、更に問題が少なくなったと思われる。

しかし、プロジェクトを始めた頃と較べて上達したとはいえ、音声面のわかりにくさは残っていた。特に日本語を始めて4ヶ月強のドラマグループの音声は、指導した者にはすばらしい上達と思えたが、寸劇を初めて見る観客にどの程度わかってもらえるかという不安が残った。

IV. ドラマプロジェクト発表会

1. 発表会の進行

発表会は平成12年(2000)2月23日の1時から2時半まで、金沢大学教育開放センターに於いて次の手順で行われた。

- ・ 担当者の挨拶
- ・ 発表 (研究発表とその中で行う寸劇12幕) 1時間
- ・ 発表者紹介
- ・ 観客からの感想や質問

2. 発表の形態と内容

【発表の形態】

発表者二人が舞台の裾に設置された演台で、コンピュータ操作をしながらスクリーンに映されるスライドに沿って発表した。その発表の中の説明などに当たる部分として、ドラマグループが12の寸劇を演じた。約一時間を要した。

【発表の内容】

プログラムに載せた留学生の発表要旨をそのまま記す。

[発表要旨： 日本の家族像…夫として父親としての男性]

私達は、日本の家族の日常を描いている漫画『サザエさん』等を使って、終戦後から平成までの家族像を研究しました。それと並行してアンケート調査を行い、その結果を分析し、漫画研究と合わせて考察しました。

アンケート調査では次の三点を調べました。1. 家庭の中の父親の権威、2. 夫としての男性、3. 現代的な若い家庭での男性の地位。調査対象は、金沢大学の日本人学生50人（男女各25人、平均年齢20.6歳）です。調査と考察の結果、以下のことがわかりました。

(1)日本の家庭では、家長である父親が権威をもっているが、その権威は実は女性に支えられてきた。(2)父親の権威は時代が現代に近づくにつれて弱くなってきている、或いは、権威の表れ方が優しさや子供の自主性を重んじる方向へと変わってきている。(3)夫としての男性も、時代が下るにつれて妻に対する優しさが要求されてきた。(4)日本人は夫も妻も愛情表現に関して恥ずかしがり屋なので、率直な優しさの表現は苦手である。(5)若い学生の間では、男性が家事と子育てをすることは男らしさを損なうものではないという認識が普通になってきている。(6)近未来において、若い夫や父親は、家事や子育てに主体的に関わることによって、家庭の中での確かな地位を保つことになるかもしれない。

この研究を通して、男性だけでなく女性も、両方が相手に対して思いやりをもち、優しさを表し、家事と子育てに主体的に関わる必要がある、という考えを新たにしました。

【寸劇】

発表中に演じた寸劇のタイトル、出典、原画の要約を資料1に記した。

3. 発表会の評価

【観客】

60人（本コースの教師を除く）の観客で満席となった。本コースの発表会始まって以来の観客数であった⁹。

【評価】

2回目のリハーサル時よりも更に上達していた。留学生達は緊張気味であったが、

大きな失敗はなかった。

以下に、観客からのアンケート結果に基づいて評価を試みる。

観客には発表に関する簡単なアンケート用紙に記入してもらった。アンケートは、発表全体、研究グループの発表、ドラマグループの寸劇に分けて、印象を5段階で答えてもらった。(5たいへんよい、4よい、3ふつう、2まあまあ、1よくない) 研究グループの発表には下位項目を設けた。(内容や構成、発音、スライドの出来栄え、発表技術) その他に、自由記述で意見や感想(発音、演技など)の記入も願った。

回答のほとんどが非常に好意的で、「たいへんよい」や「よい」が多かった。「ふつう」も少し見られた。心配した音声面については、研究グループの評価は「よい」または「ふつう」が多く、「まあまあ」が一人あっただけである。「発音」という下位項目を設けなかったドラマグループに関する発音評価は不明であるが、意見欄には発音がわかりにくいという意見はなかった。演技の良さが際立ったVに対する褒め言葉が多数見られた。また、留学生はこのプロジェクトを通して日本人の心を学んだというコメントもあった。

観客は留学生を応援してくださる方々ばかりだったので、好意的な回答が多かったものと思われるが、それを差し引いても、この発表会は成功であったと言えるだろう。

V. 反省と展望

1. 研修生達の感想

【感想文書きとその指導】

従来の「口頭発表プロジェクト」では、口頭発表した原稿と図表などを各自がコンピュータで編集し、それに思い出の写真などを添えた文集をコースの記念として作らせている。今期は個人の発表ではないので、ドラマグループは各自の感想文を、研究グループは発表原稿を文集に載せることにした。この文集作りは発表会の後に行った。ドラマグループには演じた経験を、学んだ日本語を使って形にさせるという目的で感想文を書かせた。

発表会後からコース修了まで余り時間がなかったため、教師が例を作って与え、それを学生が読んで必要な文型や表現・語彙を取り出し、それらを利用しつつ各々の言葉で書く、という方法をとることにした。即ち既習の文型、文法、漢字などを使いきるだけ一般的なモデル作文を準備した。具体的には練習の初めの頃の思い、練習時の様子、感想、役柄、難しかったこと楽しかったこと、日本の漫画に対する意見、発表会当日のことなどに少しずつ触れたものである。

留学生が自分で書く時は、各自が主張したい部分を拡張して書けば各自の個性も出るはずであった。しかし、皆同じような個性のない作文が提出されてしまった。これは実地指導の不備もあるかと思われる。提出された作文は、一旦学生に戻して、自分らしいものを書き直させ、文集に載せた。

【ドラマグループの感想文より】

研修生達は、異口同音に寸劇を演じる楽しさと苦勞、日本の生活習慣に深く触れて発見したこととその喜び、教師やクラスメートとの一体感、及び非常に大きい達成感について述べている。今回は各人が複数の役を演じたが、いろいろな人に変身する面白さについても書かれている。

「楽しく学ぶ」というキーワードで始めたが、ドラマグループは大変楽しく学び、しかも通常の日本語授業からは得られない深さで日本人の心のようなものを感じ取ったようであった。

【研究グループの感想】

研究グループは感想文を書かなかつたので、発表した二人に質問してみた。

発表会については、観客の反応を見て、成功であった、そして大変嬉しかったということであった。二人の達成感に関しては、かなりの満足度はあるが、ドラマグループほどではない。その理由として、自分達はもっと努力して関わるべきであったのに、他の日本語の授業や専門の勉強で忙しすぎて深く関われなかった、というものであった。テーマに関しては、Jは自分の専門（情報工学）とかけはなれていたので、それほど熱心になれなかったと言い、Mは専門の日本教育史に関連のある興味あるテーマだったと言った。はっきりとは言わなかったが、Jには真面目に取り組まなかった他の二人の態度に対する疑問と、その二人の脱落のせいで、試験で忙しい時に自分達ばかりに仕事がまわってきたことへの不満もあるようだった。Jは、研究グループの役割はわかっているし、勉強になったし、日本語による発表の経験は有益なものだったが、ドラマをやった方がもっと楽しそうだと思ったと言っていた。

以上の感想をまとめると、両グループとも達成感があり、ドラマグループは非常に楽しんでプロジェクトを行い、苦勞もしたが勉強にもなった。研究グループは、勉強にはなったが、もっと楽しくやればよかった、ということだろうか。

2. 指導者側からの反省

本プロジェクトは、大学で行う短期間の日本語教育という枠の中で、普通の日本語の授業と並行して、5ヶ月の集中コース内でできる活動として模索されたものであった。しかも、学習者の主体的な取り組みを促すとともに、今後の研究活動へのスムーズな移行を可能にする日本語学習である必要があった。しかし、今回の特徴的な要因は、達成感のある、しかも楽しさのある活動であるとともに、多角的な教育手法を採用しようとしたことにある。数多くの困難が予想されたが、一応の成果を示すことができたものと思われる。しかし、「ドラマ」という手法に指導する側も不慣れなことから、初歩的な間違いも多く、今後の課題となった。

3. 展望

今回の試みは、文字通り、実験的なものであったが、複合的な要素、多角的な要素は日本語教育にきわめて重要であることを改めて痛感させられるものであった。文字を読んで言葉をしゃべるだけではなく、文化と社会事情をふまえた言語表現こそが日本語教育の重要な課題の一つであろう。その意味で、今回のいわば稚拙とも思われる試みは今後に大きな展開の場を示すことになった。関係各位のご批判やご意見を受けて、また、各方面での追試的な活動を受けて、よりよい形で発展できることを望む次第である。

【謝辞】

本プロジェクトが教育活動としての一つの方向が示せたのは、多くの方々の支援を得たおかげである。関係各位に対し、厚くお礼を申し上げたい。

とりわけ、深澤のぞみ氏（富山大学留学生センター助教授）、鎌田倫子氏（金沢大学留学生センター非常勤講師）にはプロジェクトを始めるにあたって貴重なアドバイスをいただいた。また、小寺弘子氏（石川県日本語講師会講師）には基礎練習のための優れたコントを提供していただいたが、今回のプロジェクトでは活用できなかった。ルチラ・パリハワダナ氏（金沢大学留学生センター助教授）には準備段階で、岡澤孝雄氏（金沢大学留学生センター教授）にはデータ分析等でお世話になった。また、会場として使わせていただいた金沢大学教育開放センターの方々にはいろいろと便宜をはかっていただいた。ここに心からの感謝を述べる次第である。

【注】

- ¹⁾ これ以降、中・上級者を研究グループ、初級者をドラマグループとよぶ。
- ²⁾ 第9期は、平成11年(1999)10月18日に開講され、翌年(2000)3月6日に修了した。
- ³⁾ 謝辞参照。
- ⁴⁾ 日本語能力が中・上級の者を研究グループとし、口頭発表を行わせる一方で、初級の者をドラマグループとし、口頭発表の中で寸劇を演じさせる。
- ⁵⁾ ルチラ・パリハワダナ金沢大学留学生センター助教授と三浦・山口による準備チーム。

- 6) 研究グループの発表アウトラインが決まらないうちは、どの漫画が最終的に選ばれるか不明であったため、候補となるような漫画の寸劇練習をしておく必要があった。
- 7) 舞台は貸し舞台業者に依頼した。
- 8) マッキントッシュ G3 のパワーブックをスライドプロジェクターに繋ぎ、パワーポイントで作成したスライドをスクリーンに映しながら行った。
- 9) 観客集めは、招待状と E-mail で行った。招待状は、留学生や語学教育関係の少数の本学教官・事務官、日本語教師、留学生のホストファミリーや行事でお世話になった地域の方々に出した。E-mail は本コースのボランティアチューターと留学生に出した。

【参考文献】

- クロード・ロベルジュ、木村匡康、川口義一（1990）『日本語の発音指導—VT法の理論と実際—』 凡人社
土岐哲・村田水恵（1987）『発音・聴解』外国人のための日本語例文・問題シリーズ12 荒竹出版
ペタル・グベリナ、ミルコ・クラベッシュ（1994）『ヴェルボトナル法入門』 第三書房
三浦香苗・岡沢孝雄・深澤のぞみ（1998）『五ヶ月で口頭発表—1998試作版』金沢大学留学生センター
三浦香苗・深澤のぞみ（1998.3）「留学生の口頭発表に対する評価を探る—本当に伝えたいことが伝わるため
にはなにか必要か—」『金沢大学留学センター紀要』 vol.1, pp.1 - 15.
三浦香苗（1998.10）「初級段階の口頭発表プロジェクト—受信から発信へ—」平成10年度日本語教育学会秋
季大会予稿集、日本語教育学会、 pp.61 - 66.

資 料

【資料1】 発表中の寸劇の要約と出典

* 番号は上演順で、「」内のタイトルは便宜上つけたものである。要約の会話の部分とその表記は原画どおりである。

- ① 「お父さんはもう許さんぞ」『サザエさん』長谷川町子 朝日新聞社 昭和25年 第4巻 p.34
波平がカツオを叱っていて、カツオは大声で泣いている。舟とサザエはうなだれて両者の成りゆきを見守るしかない。その時波平はサザエを呼んで廊下に出た。そしてサザエに「きのきかんやつだ。はやくとりなさんか」というのであった。
- ② 「おい、子どもたちはもう寝たのか」『サザエさん』同 昭和35年～37年 第23巻 p.110
酔って遅く帰宅した波平。迎えに出た舟に「おいッ、こどもたちはどうしたっ!!」と大きな声で聞く。しかしみんな寝たと知ると態度が一変し、舟に平謝りする。そこへタクシーの運転手が笑いをこらえながら玄関から顔を出す。料金がまだだったのだ。
- ③ 「おはようくらい言ったらどうだ」『サザエさん』同 昭和41年 第33巻 p.30
朝、洗面所でカツオとすれちがった波平。「オイおはようぐらいいったらどうだ?」と言うが「おはようぐらいいわなくなつていいじゃない!」と言い返されてしまう。「ま、そいうやそーだ」と妙に納得してしまう波平。しかしそんな波平にサザエと舟は「そこがだいじなとこよ、おとうさん!」「そこから日本はくずれていくんですよ!」と意見する。
- ④ 「おい、めしはまだか」『コボちゃん』植田まさし 蒼鷹社 昭和58年 第2巻 p.106
こたつでくつろぐコボちゃん一家。コボちゃんがおじいちゃんの実似をする。「オイ!、メシはまだか!」「フロはわいてるか!」その後台所に顔を出したおじいさんは普段とは違って遠慮がちに丁寧に「あの一

ごはん まだですか?」と尋ね「やめてください きもちわるい」と一蹴されるというもの。

- ⑤「まあ、寄ってきたまえよ」『サザエさん』長谷川町子 朝日新聞社 昭和32年 第18巻 p.38
マスオが急に会社の同僚たちを家に連れてくる。次つぎと家に入る客をにこやかに出迎えるサザエ。だがマスオが入ってくると恐れ顔でにらみつける。ところがにらみつけたのはマスオによく似た客だったのだ。「あのかたあなたにてんのね。まちがっちゃった」が最後のサザエの言葉。
- ⑥「あ、雨がふってきた。迎えに行つてやろう」『サザエさん』同 昭和41年 第33巻 p.48
舟をバス停まで迎えに行きじっと待つ波平。しかし帰ってきた舟には「なに、たつたいまタバコ買いにきたついでだ」と言う。舟は「へんなとこでみえをはるんだから」とお見通しである。
- ⑦「どれ、肩をもんであげよう」『サザエさん』同 昭和31年 第9巻 p.8
夜、夫婦二人。新聞を読んでいた波平は縫い物をしている舟の肩をもんでやる。舟は感謝と当惑の気持ちを「まあまああした雨がふらなければいいか」という言葉にする。ところが雨がふることは隣室で寝ようとしていたカツオにとって大問題だった。彼は「よしてよおとうさん」と父の行動を制する。明日はカツオの遠足だったのだ。
- ⑧「今でもあたしを愛していらっしゃるんですか」『サザエさん』同 昭和39年 第28巻 p.47
平謝りの波平。「いまでもあたしを愛していらっしゃるんですか?」という問いにも「あいしているとも!」と答える。しかし舟の機嫌が直るや否や、あわててテレビに走り寄り、スイッチを入れた。野球はまさに今9回の裏、見どころであった。
- ⑨「おれだつてたまにはどなるぞ」『サザエさん』同 昭和25年 第4巻 p.49
会社から帰ってきたマスオが目にしたのは散らかり放題の部屋だった。意を決して怒鳴ったマスオ。「すみません」と言うサザエの目には涙があった。それを見てすぐ謝ってしまったマスオだが次の瞬間、サザエの涙はたまねぎを切っていたからだと気付く。
- ⑩「むろん君だ」『サザエさん』同 昭和46年 第42巻 p.62
サザエの家の隣の夫婦。庭仕事に余念のない夫に妻が話しかける。話題は都知事選だ。「あなた、ミノベさんとハタノさんどっちえらぶ?」と聞く妻に夫は反射的に「むろんキミさ!」と答える。一瞬きょんとした妻だったが、仕事と妻とどちらが大事かいつも夫に答えさせているからだと納得する。
- ⑪「婦人週間だ。ゆっくりおしよ」『サザエさん』同 昭和31年 第16巻 p.3
会社から帰宅した男たち(波平、マスオ)は口ぐちに婦人週間だからゆっくりしろと言う。だが「ゆっくりおし」「のんびりおしよ」と言いながらのんびりしている男たちと違って女たち(サザエ、舟)にはしなければならないことがたくさんあるのだ。
- ⑫「たらこ200グラム」『サザエさん』同 昭和41年 第33巻 p.52
会社帰り、帽子にはさんだ買物メモを見てデパートに寄る波平。買物後のデパートで「それはボクのほうしだ!」と声をかけられる。帽子がそうなら買った「たらこもおたくのわけだ」ということで中年男二人は帽子だけでなくたらことそのお金も交換するのであった。

【資料2】研究グループの発表原稿

「日本の家族像 - 夫として父親としての男性」

「日本の家族像 - 夫として父親としての男性」について発表させていただきます。

1. 導入

日本は、この世紀に入って以来、様々な変化を遂げました。人間関係、特に家族関係においても、変化が起こっていると思います。外国人は、日本に関して次のように教えられています。すなわち、日本の特徴の一つは、伝統的で堅固な家族構成であり、父親の地位が高く、父親が家族の日常を支配しているということです。しかし、私達は、それが現代の日本の家族の本当の姿なのだろうか、現実はそうではないのではないかと考えました。

そこで、日本の家族の日常を描いている漫画『サザエさん』などを使って、終戦後から平成までの家族像を研究しました。それと並行して、アンケート調査を行い、その結果を分析してみました。

2. アンケート調査

2 - 1 . 主に次の三点を調べました。(1)父親の権威は家族の中で堅固なものであるか、(2)夫としての男性はどのように扱われているか、(3)現代的な若い家庭では、男性の地位はどうなっているか。

2 - 2 . 調査の方法：

金沢大学角間キャンパスの学生にアンケート調査をして、回答用紙に記入してもらいました。24の質問を書いた1枚のシートで、答えは選択式です。去年の12月20日に調査を行いました。全部で56人から回答を得ました。その中に6人の外国人留学生が入っていましたが、今回の分析では日本人学生50人だけを対象にします。回答者の年齢は、幅が小さく、18歳から24歳、平均年齢20.6歳です。男女比は、男性25人、女性25人です。アンケート調査で得たデータの分析に際して、必要な場合はカイ自乗検定を行いました。

3. 調査結果と考察

3 - 1 . 『サザエさん』の家族構成

調査結果と考察は、漫画からとった場面を演じながら述べていきます。そこで、漫画『サザエさん』の家族構成を、ここで一応確認します。これは『サザエさん』の家族構成です。

##スライド 『サザエさん』一家の図

サザエさんは、この人です。サザエさんは、お父さん「磯野波平」とお母さん「磯野舟」の長女です。サザエさんには、年のはなれた弟と妹がいます。「磯野カツオ」と「磯野ワカメ」です。そして、サザエさんは結婚していて、夫は「ふぐ田マスオ」です。ですから、サザエさんの名前は「ふぐ田サザエ」となります。マスオとサザエには小さい子供がいて、「ふぐ田タラ」ちゃんです。この人たちが、全員で一軒の家に住んでいます。

3 - 2 . サザエさんの家庭の父親の権威

では、このサザエさんの家庭の父親の権威を見てみます。まず、「子供を叱る」という点で見てみました。アンケートで「次のような場面はあなたの家でも実際にあるか」とききました。父が子供を厳しく叱るのですが、叱りながらも、実は家族の年長の女性がとりなしに入るのを待っているという場面です。次の場面をごらんください。

寸劇：お父さんはもう許さんぞ 昭和25年

このように、父は家族の一番偉い人として子供を叱りますが、実は女性のとりなしによって丸くおさめたいと思っているのです。

アンケートの結果では、50人中18人(36%)が、このようなことが自分の家庭でもおこる、と言っています。18人の「はい」と答えた人の中で、父が叱り、母がとりなす家庭は10で、反対に母が叱り父がとりなす家庭は3です。データの数が少ないので、はっきりしたことは言えませんが、やはり父が叱る方が多いようです。

この芝居のもととなった漫画は、実は昭和25年に描かれたもので、終戦後まもないころです。調査の結果から、このような強い父と、それをかげで支える母や姉という図式は、平成の現代でも残っていると見える

と思います。

では、本当に父親は強く偉かったのかというと、実は子供にわからないところで、子供の母、つまり自分の妻に、頭を下げていたりするのです。次の場面をごらんください。

寸劇：子供たちはもう寝たのか 昭和30年代

また、時代が現代に近づくにつれて、父親の権威があやうくなってきている様子も漫画に示されています。これは昭和41年の漫画からとった場面です。

寸劇：おはようぐらい言ったらどうだ 昭和41年

御覧のように、父の権威が弱くなっています。

次の場面は、『サザエさん』ではなく、『コボちゃん』という漫画からとったものです。

『コボちゃん』の家族構成を簡単に言いますと、おじいちゃんとおばあちゃん、コボちゃんのお父さんとお母さん、そして「コボちゃん」が一つの家で暮らしています。むじゃきな子供のコボちゃんがおじいちゃんの威張った様子をまねをします。おじいちゃんは、それまで自分で気付かなかった威張ったものの言い方が恥ずかしくなります。

寸劇：おい、めしはまだか 昭和58年

時代が段々現代に近くなると、威張ってばかりいる男はみつともない、と思われてくる、ということがわかります。

次に二つのアンケート結果について述べます。アンケートで次の質問をしました。

質問：お父さんが子供の前でお母さんにやさしくしたとします。そんな時、父親としての権威が損なわれるとあなたは思いますか。

答えは、はいが1人、いいえが45人でした。つまり、ほとんどの人が、父が子供の前で母にやさしくすることは、父親の権威を損なわないと言っています。現代では、子供の母にやさしくする父親が、家族に受け入れられる、ということだと思えます。

もう一つのアンケートは、重大なことの決定権に関するものです。次の質問をしました。

質問：あなたの家では、進学、就職、結婚に関する最終決定権を持っているのは誰ですか。

答えの選択肢は、父、母、父と母、本人、その他（ ）です。答えは「本人」が圧倒的に多く、父だけと答えた人は、進学で7人、結婚で1人でした。昔のデータがないので断定できませんが、これは戦前の日本と較べると、ずいぶん違う結果なのではないかと思えます。

以上、父としての男性の権威について見てみました。

父の権威に関して次のことが言えると思えます。

1. 日本の家庭では、家長である父が一応権威をもっていますが、実はその権威は女性に支えられていること。
2. また、父の権威も時代が現代に近くなるにつれて、段々弱くなってきている、あるいは権威の表れ方が、妻へのやさしさや、子供の自主性を重んじる方向へと変わってきていること。この二つが言えると思えます。

3 - 3 . 夫としての男性

次に、夫としての男性を見てみます。

次の場面は、夫マスオが突然会社の同僚を家に連れてきた時に、妻サザエが外交的な笑顔で従順な妻の役を演じますが、夫に対しては怒った顔を見せる、というものです。昭和32年の漫画です。

寸劇：まあ、寄ってきたまえよ 昭和32年

アンケート調査の質問は、「あなたの家ではお母さんは、外に対しては従順な妻の顔をして、夫には怒った顔を見せますか」というものです。80%の人が「いいえ」とこたえました。

では、夫は妻に対して態度や言葉でやさしさをあらわすか、という点を見てみましょう。

サザエさんのお父さんの年代の人は、妻に対してやさしくすることはあるのですが、それを恥ずかしがるようです。次の場面は、昭和41年ごろのことです。雨が降ってきたので、波平が妻舟をバスの停留所まで傘をもって迎えに行く、という場面です。ちょっと説明を加えますと、現代では雨が降って来た時にバス停までかさを持って家族を迎えに行くことは、あまりしなくなったようですが、昔は駅やバス停まで迎えに行く人が多かったのです。

寸劇：あ、雨が降ってきた。迎えに行つてやろう。昭和41年

このように、夫は、妻にやさしさを示すのは恥ずかしいようです。外国人の私達には、これは日本の男性の特徴のようにみえます。

これに関して、アンケートで次のように聞いてみました。

質問：あなたのお父さんは、お母さんにやさしくして、ありがとうと言われた時に何と言いますか。

答えの選択肢は、三つです。a.「お前のことが好きだからしたんだよ」という意味のことを言う。 b.見栄をはって「何でもないよ」と言う。 c. 何も言わない。

結果は、aの「好きだという意味のことを言う」が少なく、3人だけでした。bの「何でもないよ」は12、cの「何も言わない」は34でした。bcに関しては、予想どおりでしたが、aと答えた日本人が3人もいたのは、ちょっと意外でした。

次は、夫にやさしくされると、妻も驚きますが、他の家族も驚くという場面をお見せします。昭和31年(1956)の漫画です。留学生のために、ちょっと説明を加えますと、日本人は、ふだん怠けている人が突然よく働いたり、ふだん悪いことばかりしている人が突然いいことをしたりすると、神様がびびりして「雨が降る」と言います。だから、ふだんやさしくない夫が突然妻にやさしくすると「あした雨が降るんじゃないか」と心配します。では、御覧ください。

寸劇：どれ肩をもんであげよう 昭和31年

次は、夫は他の人が見ていなければ、妻にやさしくしたり、あやまつたりすることができますが、少し恥ずかしいと思う、という場面です。まず、としより夫婦、波平と舟の場面です。

寸劇：今でもあたしを愛していらっしゃるんですか 昭和39年

としとった妻でも、やはり「愛している」とたまには言ってもらいたいし、「愛している」と言われると、怒っていても、機嫌をなおします。波平は、妻に対して「愛している」と言ったことが、やはり恥ずかしいので、すぐテレビの野球に飛びついたのでしょう。

次は、若い夫婦マスオとサザエです。時代は少し古く、昭和25年です。ふだんはやさしいマスオですが、家に帰ってくると、家の中がとてもちらかっています。怒ったマスオは、「おれだって、たまにはどなるぞ」と決心して、どなります。すると、サザエが泣いたので、あわててあやまります。気の弱い、やさしい夫です。

寸劇：おれだつてたまにはどなるぞ 昭和25年

次は、夫は妻のこわさをよく知っていて、妻に聞かれると、「君が一番大切だ」とか「愛している」とか言いますが、実は上の空だ、という場面です。どこの国にでもあることかもしれません。

寸劇：むろん君だ 昭和46年

このように見てくると、日本人の夫は妻に素直にやさしさを示すのは苦手で、恥ずかしい気持ちがあるらしいということが分かります。妻も、夫のその恥ずかしさがわかっている、夫がうまく愛情を表現できなくても、許します。日本人は男性も女性も、愛情表現に関しては、恥ずかしがり屋のようです。

しかし、日本人の女性は、ほんとうは、夫に言葉や態度でもっとやさしさを示してもらいたがっているのではないかと私達は考えて、アンケートで次の質問をしました。

質問：お母さんは、お父さんからの優しさを直接に示されるほうを好むと思いますか。

答えは、はい：いいえ=25：21 で、約半数ずつでした。

「直接に示される」の意味を回答者がどう受け取ったかが分からないので、はっきり言えないのですが、約半数が「いいえ」だったのには、驚きました。「はい」が多いだろうと予想していたからです。この結果を見て、日本の男性が恥ずかしがり屋で愛情表現がへたなのは、実は、女性も恥ずかしがり屋が多いからではないか、と考えるようになりました。

次に、「やさしくすること」についてのアンケート結果を述べます。アンケートで以下の質問をしました。

質問：あなたのお父さんは、家族の前でお母さんにやさしくしますか。

質問：あなたのお母さんは、家族の前でお父さんにやさしくしますか。

答えは、どちらも「はい」と「いいえ」が約半分ずつでした。そして、父が母にやさしくする家庭では、母も父にやさしくする、という相関があることがわかりました。

以上、日本の夫としての男性像を見てみました。夫としての男性も、時代が現代に近付くにつれて、威張って自分勝手なことばかりしてはいられなくなり、妻に対するやさしさを、それなりに示さなければならなくなってきたようです。ただし、日本人は、夫だけでなく妻も、愛情表現に関して恥ずかしがり屋なので、率直な「やさしさ」の表現は、なかなか難しいらしい、ということがわかりました。

3 - 4 現代的な若い家庭での男性の地位

次に、現代的な若い家庭では、男性の地位はどうなっているかを考察します。

その前に、まず、「婦人週間」というキャンペーンが始まったころの『サザエさん』の家庭を見てください。昭和24年（1949）から「婦人週間」が始まりました。婦人の参政権行使を記念して、婦人の自主性と地位向上を目指した活動を行うためのものですが、『サザエさん』のような普通の日本人家庭では、「婦人週間」といっても、ことばだけだったようです。

現代の私達には当たり前の考えでも、その時代の人には難しいことだった、ということがわかります。すなわち、婦人の地位向上のためには、家庭の中での家事労働を女の人だけに押し付けしないで、男の人でも家事に参加するべきだ、という考えは、ひと昔前の人、特に男性には、それが具体的に何をすることなのかわからなかったらしい、ということです。

寸劇：婦人週間だ。ゆっくりおしよ。昭和31年

御覧になったように、波平さんもマスオさんも、良い夫のつもりなので、「婦人週間」だから婦人が楽にすればいいと思います。そして「ゆっくりしなさい」と口で言います。しかし、行動が伴わず、相変わらず自分は何もしません。婦人達は、そのことを怒りますが、「けっきょく男は昔から何も家事をしないんだから」と思ってあきらめているようです。夫だけではなく、妻の方にも、「家事は女がするものだ」という暗黙の了解があるのでしょう。

では、男は家庭のことを何もしなかったかということ、そうでもありません。たとえば、会社の帰りに都心のデパートで食べ物を買ってくるように妻に頼まれれば、買ってくるのです。

妻はメモ用紙に「たらこ300グラム」と書いて、夫に渡します。夫は、それを忘れないようにメモ用紙を自分の帽子の中に入れておいて、会社の帰りにデパートに寄って、買い物をして帰ります。

寸劇：たらこ200グラム 昭和41年

こういう手伝いなら、昭和中期の夫も、良い夫であれば恥ずかしがらずにできたのです。しかし、これは、自分が主体的に家事の責任をとる、ということではなく、あくまで、ちょっとした手伝いをするだけです。家事は全面的に妻が責任を負っていたのです。夫は、外で働いて、給料を運ぶだけで、家事の責任は妻がとる、という図式です。

そこで、次のことが問題になります。

父としての権威が弱くなり、昔のように「威張っていて、やさしきなんか示さない夫」が嫌われ、馬鹿にさ

れるようになった今、日本の男達は、家庭の中で、一体どうすれば、高い地位を保つことができるでしょうか？

その一つの解決策として、漫画『クッキング・パパ』が登場します。では、『クッキング・パパ』の簡単な紹介をします。

昭和61年（1986年）に出た漫画です。主人公は、福岡市に住むサラリーマンで、

##スライド 漫画（荒岩一味の顔）

荒岩一味という名前が31歳です。金丸産業という会社の営業主任をしています。

妻荒岩虹子は新聞社に勤める新聞記者です。

##スライド 漫画（荒岩虹子の顔） いわゆる共働き家庭です。

子供が一人いて、誠という名前が7歳です。

##スライド 漫画（荒岩誠の顔）

一味は、仕事をバリバリこなして、急いで家に帰り、夕飯を作ります。料理が大好きでプロ並みの腕前で、この日は、イタリアン鍋という料理を作ります。

##スライド（料理場面）

御飯のあとは、子供と一緒に風呂に入って、その後一緒にゲームをして遊びます。

##スライド（風呂、ゲーム場面）

仕事で忙しい妻が帰って来ると、「めし、できてるぜ」と言います。妻は「うん、サンキュー」と言います。

##スライド（妻が帰って来た場面）

一味は、それから会社へもう一度行って、残業をします。残業が終わって帰ってくると、妻は家で仕事をしています。

##スライド（夫帰宅、妻仕事の場面）

そして、「お弁当、今日もうまかったよーっ」と言って、お弁当箱を夫に渡します。

##スライド（弁当を渡す場面）

夫は明日の朝ごはんの下ごしらえをしています。妻は、夫に甘えて「何してんの？」と抱きつきます。夫は抱きつかれて、ちょっと恥ずかしそうにして「明日の朝はうどんにしようと思ってな。」と言います。

##スライド（抱きつく場面）

「こんな家庭が日本にあるのだろうか？」と思いませんか。こんなに家事を全部やっているくせに、男っぽくて、仕事もバリバリこなして、子供にも妻にも愛されて、尊敬もされているらしい。これは、女にとって都合のいい「夢のような男」が描かれているだけだ。こんな男は、女を増長させ、墮落させるだけだ。これは、漫画だ！

日本人の結婚している女の人にきいてみると、口をそろえて「こんな夫だったらいいわねえ」と言います。ほんとうに日本の女性は、こういう男性を望んでいるのでしょうか。そこで、アンケート調査で、次の質問をしました。

質問：家庭で料理をする男は男らしくないと思いますか。

質問：家庭で掃除をする男は男らしくないと思いますか。

質問：家庭で子育てをする男は男らしくないと思いますか。

答えの選択肢は、1. 2. 3ともに、a. はい、男らしくない b. そんなことはない c. いいえ、男らしいです。結果は、「a. はい、男らしくない」は、ゼロでした。

そして、積極的に「男らしい」と答えた人は、料理と子育てが15人、掃除が14人、で、消極的に「男らしくないことはない」と答えた人は、その約2.2倍の33人か34人でした。つまり、料理、掃除、子育ての全部に関して、「男らしくないとは言えない」という結果が出ました。

アンケートに答えてもらったのは、18歳から24歳、平均年齢20.6歳です。30代以上の人の見解は聞いていないですが、少なくとも、この年代の若い大学生は、家事をすることは男らしさを損なうものではない、と思っているのです。

ほんの数十年前までは、「男は台所に入るものではない。それは女のすることだ」という意味で、「男子厨房に入らず」と言われていたそうです。何という意識の変化でしょう。

しかし、現実はどうでしょうか。日本には家事を主体的にやっている夫がいるのでしょうか。まわりを見回してみても、「クッキングパパ」のような人は一人もいません。どうしてだろうか、と不思議な気がします。

ちなみに、私はデンマーク人ですが、私の父は「クッキングパパ」のように家事をどんどんやります。そして、男らしい人です。それは、私の国ではめずらしいことではありません。

アンケートの質問に、「あなたは家事や子育てを主体的にやる夫になりたいですか」という項目を入れなかったのも、残念ながら、答えはわかりませんが、近い将来にはそんな男性も出てきてもらいたいと、私は思います。

以上、現代的な若い家庭での男性の地位を見てみました。「クッキングパパ」は漫画でありますし、かなり極端な形ではあると思いますが、漫画はその時代の世相をある程度反映します。また、アンケート結果からも、家事をする男のイメージは悪くなく、むしろいいイメージをもたれていると思われます。

結論

以上の考察をまとめて、結論を述べます。

1. 「父親の権威は家族の中で堅固なものであるか」という点に関しては、

- ・日本の家庭では、家長である父が一応権威をもっているが、その権威は女性に支えられていること。
- ・また、父の権威も時代が現代に近くなるにつれて、段々弱くなってきている、あるいは権威の表れ方が、やさしさや子供の自主性を重んじる方向へと変わってきていることが言えると思います。

2. 「夫としての男性」に関しては、

- ・父親としての男性と同じく、時代が下ってくるにつれて、威張ってばかりいるのではなく、妻に対するやさしさを、それなりに示さなければならなくなってきたと言えます。
- ・ただし、現在40代から50代半ばの日本人は、夫だけでなく妻も、愛情表現に関して恥ずかしがり屋なので、率直な「やさしさ」の表現は、なかなか難しいようです。

3. 「現代的な若い家庭における男性の地位」に関しては、

- ・若い学生の間では、男性が家事と子育てをすることは男らしさを損なうものではない、という認識が普通になってきていることがわかりました。
- ・近未来において、若い夫や父親は、家事や子育てに主体的・積極的に関わることによって、家庭の中の確かな地位を確保できるだろうと思います。

戦後から高度経済成長、バブルとその崩壊を経て、平成になって新しい価値観が求められています。そのような時代に、弱くなってきた父親の権威と、あやうくなってきた夫の地位を回復するために、賢い男達は、外に出た女達が手放したものの、つまり、やさしさと家事と子育て、の主導権を握ることによって、家庭内での確固とした地位を確保しようとしているのではないのでしょうか。

女達は、自分に都合のよい男が増えた、と喜んでばかりはいられません。やさしさと家事と子育てを置き去りにしてしまうと、ひと昔前の日本の男のようになってしまいます。

どうやら、男も女も、両方が、相手に対して思い遣りを持ち、やさしさを表し、家事と子育てに主体的に関わる必要があるようです。

以上で、「日本の家族像 - 夫として父親としての男性」についての発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。

【資料3】 写真（発表会当日と練習の様子）

写真1 舞台と観客席

正面左手に黒く見えるのが幕、右が発表席で上方にスクリーンが見える。



写真2 発表の様子

スクリーンの右下に立っているのが発表者。プログラムを見ながら発表を聞いている観客。

写真3 寸劇

波平がバス停で待っているとバスが来る場面。「あ、雨が降ってきた。迎えに行つてやろう」より





写真4 練習風景の①
「お父さんはもう許さんぞ」より



写真5 練習風景の②
「おれだつてたまにはどなるぞ」より



写真6 練習風景の③
「婦人週間だ、ゆっくりおしよ」より

Hybrid Drama Project 2000
— Based on reading comprehension and Japanese Studies,
a presentation of research results utilizing drama —

Kanae Miura, Michiyo Yamaguchi

ABSTRACT The five-month intensive Japanese language course that we provide was originally based on the concept of being preparation for the students' individual research. As such, we provided instruction to the students in oral presentation in the form of a "Oral Presentation of Research Data Project", the guidance for which was held in parallel to their regular Japanese classes. However, it became apparent that this presented an overload of mostly irrelevant work for participating students who were not going on to become research students. Moreover, the project did not always attain its primary purposes of equipping the student with new tools for their research, or improving their skills, language or otherwise. This obligated us to search for a different and more effective means of combining the study of Japanese language and affairs, while providing a background that would be useful in their post-program education/research. The resulting program is our first effort to provide such a "complete package".

The central factor of this project was the synthesis of the concepts of drama and oral presentation. More specifically, we abandoned the original format of having each student give an individual presentation on their own research theme, choosing instead to have them create and present a drama that was directly related to a central research topic that was shared by all. By putting all the students "in the same boat", and having them work progressively on a single project, there is (we propose) a sense of accomplishment that can be gained upon successful completion of the project; and the imperative teamwork fosters cordial relations among the involved members. Considering the idea in terms of its educational merit, the concept of removing studies from the narrow confines of language acquisition, and combining it with elements unrelated to language study, such as cultural studies and lifestyle, creates a unique opportunity for the student to learn in a three-dimensional fashion. Furthermore, this mode of study is combined with research, survey (and the accompanying analysis techniques) skills, and oral presentation skills within this new format. In that sense, this project still remains faithful to fundamental objectives of the course, while introducing these new elements. For this reason, we designated it the "Hybrid Drama Project"

This report is a summary of the results of our experiment, written immediately after the completion and presentation. As such, it is not a detailed examination of the project, but merely a write-up to be passed among colleagues. We hoped that our alacrity in its publishing would prompt useful observations and comments from our comrades in the field of education.